
ラジアータ・マイ・ストーリーズ The episode

零式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラジアータ・マイ・ストーリーズ The episode

【Nコード】

N1806Q

【作者名】

零式

【あらすじ】

神を超えし者の称号を一時持ち、捨てた女性『アルカード』

その片割れとして生まれた男『シオン』アリシア

プログラムのスペシャリストであり、とある組織の上部核『Zero式』

そのZero式のパートナーである青年『アクト』

この四人と一人の少女に起きる数々の試練と戦い！

そして、そこで生まれる一つの恋。

果たして、その恋の行方とは・・・
そして、この世界の運命は・・・

今。その運命に立ち向かう五人の戦いが始まる！

Case 1:『ラジアータ・ストーリーズ』（前書き）

——それは……一つの奇跡。

”神”と呼ぶ者と後々世界を揺るがす存在となる者。

その二人が……出会う時。

一つの恋の物語が幕を開ける。

そして、その舞台となる場所の名は……

？ラジアータ？

第一話：【ラジアータ・ストーリーズ】

Case 1: 『ラジアータ・ストーリーズ』

「うつ……」

目を覚ましたのは、一人の男。

名は『シオンⅡアリシア』

アルカードの片割れで、彼女に足りぬ部分が具現化した者。

「ここは何処だ？」

「うつくん……？」

次に起きてきたのは、先ほど説明した女性。

この者こそ、”神々を超えし者”……名は『アルカード』

現在は、超えし者の名を捨て……とある組織を結成し、その一生を満喫していた。

「アルカード、何でここに？」

「——あら、シオンじゃない。こんな所で何、寝てるのよ。」

「それはこっちの台詞だ……」

「どおおお！？ ここは一体何処じゃあああ！？」

シオンとアルカードが会話している所で目を覚まし、若干パニックになっている男……

彼の名は『Zero式』

当然、本名ではなくコードネームなのだが……その素性を知る者は誰も居ない。

噂では、とつくに自分で忘れてるんじゃないかと噂されている。
一応、組織の上部核の一員。

「あら、ゼロじゃない。」

「お前も寝てたのか」

「シオン、アルカードまで……」

「ゼロ……？　ここは……」

ゼロの隣で目を覚ました青年……名は『アクト』

ここに目覚める大分前までは殺人責を生み出す工場に居たが、ゼロに助けられ

彼のパートナーとして、人生を有意義に暮らしている。

ゼロの影響もあつてか、オタク知識は中々高い。

「アクト、お前もここに眠っていたのか」

「シオンさん、アルカード様まで……」

「アクト、私の事はあだ名で結構よ。　家族なんだから……」

「すみません……それよりも、ここは一体――」

「さあな、一つ分かることは……」

よく見ると、四人の目の前には……大きな城が立っていた。

「俺達は、何者かの手によって強制トリップさせられたって事だな

……」

「強制トリップ……！　そのような能力が使える者が居るのですか
！？」

ゼロの言葉にアクトは若干驚きを隠せずに居た。

「居るわよ、たまーにだけど……そういう能力を使う奴はちらちら
居るわよ。」

アクトの質問にアルカードが答える。

「だとしたら、さつさと事件を解決しないといけないな……」

「だけど、どうするんだ？　俺達をトリップさせた張本人は姿すら
確認していないし……」

「それに、下手に動けば相手の思う壺よ？」

「だけど……こうやって、ジツとしているにもイカんだろ？」

「シオンさんの言うとおりでと思います。ここでジツとしていても逆に相手の思う壺かもしれませんし……」

「そうね……それじゃあ、動くとしましようか」

とりあえず、四人は目の前にある城を確認していた。

周りには、大して異常はあらず……ただの塀だけがデンツと立っていた。

そこへ、アクトが何やら発見したようなので、一同はアクトが見つけた場所まで向かう。

アクトが見つけた場所には、大きな入り口がポツカリと開いており

……

置き看板らしき物が置いてあった。

その看板の文字は、訳のわからない文字が書かれていた。

「な、なんのこつちゃ……？」

「任せんしゃい、こういう解読は俺の得意分野さ」

ゼロの得意能力。

それは、現実の物体をデータにする能力。

例えるならば、ゼロの周りの物は全てPCのデータのようになっていると思えばいいだろう。

その様にして、ゼロは物質のハッキングや解読……様々な事が出来るのだッ！

「成る程……翻訳解読の結果。『騎士団セレクション会場』って奴だ。」

「はーん……セレクションねえ……」

「ふははっ！ そうとも！」

後ろで、声が聞こえる。

振り返ると、印象的なアゴをして……

派手やかな装備を無茶苦茶に無理やりと押し込んだ格好をした男が立っていた。

「ここは、騎士団セレクション会場入り口！ 君達のような雑魚が来る場所ではない！」

「雑魚ねえ……」

……一応、四人とも最強設定である。

そんな事も知らないで、男は段々と話を進める。

「君達のような平素な平民風情を私が守ってやるのだあ……光栄に思うと良い！」

「はいはい、それで？ 残す言葉はそれだけか？」

ゼロは、呆れた顔をして質問する。

「ああ、分かったのなら……」

次の瞬間、男の体は吹っ飛んでいった。

ゼロのストレートパンチが炸裂したのだ。

男の体は、無残にも崩れるように落ち……そのままノビてしまった。

「弱ッ！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

シオン達が降り立つ同時刻……

「……………朝か」

目を覚ました一人の女性。

彼女の名は『リドリー・ティンバーレイク』

ラジャータ城に住む令嬢である。

彼女が……後に世界を揺るがす存在になるとは、誰も予想だにできなかっただろう……

「今日は、とても大事なセレクションの日……」

（私が騎士になる為に頑張らなければならない時だ……！）

そう、彼女も騎士団セレクションに参加する一人であった。

コンコンッ

ドアのノック音が鳴る。

「リドリー様、失礼します。」

一人の女性が入ってくる。

彼女の名は『ナツメ』

若くして騎士団の隊長となっており、リドリーの父ジャスネの直属の部下。

（実はジャスネの事が好きでいるとか……）

「今日はとても大事なセレクションの日でございますね。」

「このナツメ、一身全霊で応援しますので……頑張ってくださいませ！」

——その為か……若干、変態並みにリドリーの事に気を使う。

「あ、ありがとう……」

「おおー！ 起きたかリドリーよ！」

そこへ、一人のアンパンマン……ゲフンゲフン！ ……一人の男がやってくる。

彼の名は『ジャスネ』

リドリーの父親だが……すごく似ていない。どっちかというとリドリーは母親似である。

そして、このアンパンマン。異常なまでの娘好きである。

実の娘を恋人のように大事にしている。（最終的には、ストーカーになりかねん……）

「実はな、リドリーよ。 お前に”とっておきのモノ”を用意したんだ」

後ろから、三つほど布に隠された荷物が運び込まれてくる。

「お、お父様……これは？」

「驚くなよ？」

ジャスネは、布を外すと……美しく輝く銀や金で彩られた甲冑が……
「こ、これは……？」

リドリーは、若干父のする事に呆れていた。

「ふっふーん！ リドリー専用の甲冑だ！」

ジャスネは、自身満々に言う。

そして、次々と甲冑の説明をする。

そんな父を見たリドリーは……

（普通、ここまでするかね？）

と言わんばかりに呆れ果てていた。

「さあ、リドリー！ 好きなものを選ぶと良い！」

「……結構です！」

そう言い、リドリーはジャスネ達を追い出した。

「……お母様、お父様は何時もあんな感じだったのでしょっかね……」

「……？」

彼女の母親……名前は不詳だが、昔……不慮の事故により亡くなったとか……

その母の名、父の名を一身に背負った彼女は……騎士になることを決意した。

それが……己の人生さえも潰してしまう事でも……

「お母様、どうか……私にお力を……」

だが……その願いも、一人の男の手によって打ち碎かれる。

そう……今、城の中でセレクションの受付を済ませたこの男の手によって……

「なあ……マジで、俺がセレクション制覇しないと駄目なのか？」

「シオン……貴方は、このメンバーの中で唯一パワーキープできる者なのよ？」

「だがな……」

「……勝ったら、貴方の好きな食べ物 奢^{オコ}るけど？」

「よし、ノった。」

そんなシオンとアルカードの会話が、流れていく中。

まもなくセレクションが始まるうとしていた。

誰もが、普通と思われたセレクション……

それが、一気に常識外れの出来事になるとは……誰も予想していなかった。

Case 1:『ラジアータ・ストリーズ』（後書き）

どうも、零式です。

今回から、この小説を書いていこうと思いますぜ？

一応、この作品は別の場所で完結しており・・・

更新速度はあつという間かも（？）しれませんが、そこん所ご理解くださいマーシ。

？ここからは、詳しいキャラプロフィールです。？

・アルカード

性別：♀

性格：大らか（？）・温厚

主な立場：ボケ

『神を超えし者』の称号を昔持っていたが・・・今現在では、破棄してしまい無い。

だが、その力は衰えを知らず・・・素手で戦闘ヘリ100機落とせる程の実力を持つ。（マジでやったらしい）

そんな彼女だが、やはり女性なのか・・・実は一度だけだが、本気の恋をした事があるとか・・・

しかし、それは悲しい別れになったとか・・・

（後々、その話に少しずつ触れていこうと思う。）

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

・シオンⅡアリシア

性別：♂

性格：冷静・イケメン♂

主な立場：ツツコミ・恋愛担当

今回の主役とも言える人物。

その正体は、アルカードから生まれた。 言わばもう一人のアルカード。

彼は、アルカードとは異なる性格・癖・能力・その他を備えている。所謂・・・『アルカードに無い物を持った者』というわけである。

今回、リドリーに一目惚れしてしまったが・・・果たして、恋の行方はイカに・・・

（ちなみに何故、シオンだけフルネームなのかは・・・その内分かります。）

- - - - -
- - - - -
- - - - -

・Zero式

性別：♂

性格：少しばかり破天荒。

主な立場：ツツコミ・BL担当

アルカードが結成した組織の上部核の一員。

その能力は大変優れており、チームの頭脳担当とも言える。

三次元の物体を全てデータとしてハッキング等が出来る。

勿論、二次元も含まれる。

（普段の呼び名は、『ゼロ』となっている。）

Case 2: 『シオン VS ・ リドリー』 (前書き)

? まえがき?

どうも、零式です。

何故、こんなに更新早いかって?

(# 零) < 次の小説が、ステンバーイしてるんだよおおおお
!!!!

・・・じゃあ、何故にこんな小説を書いたし? と思いの方に言っ
ときます。

(零) < ・・・なんとなくだッ! 悪いか!?

そんな所です。

さて、簡易版キャラ設定でも・・・

? 登場キャラ?

・ シオン II アリシア : 今作の主人公。 アルカードの片割れである。

・ アルカード : サブ主人公。 神を超えし者の称号を持っていた女
性。

・ Zero 式 (通常の呼び名 : ゼロ) : エンジニアでは無い。 三
次元を全てデータのようにハッキングできる。

・アクト：ゼロのパートナー。 オタク知識が異様に高い。

・リドリー・ティンバーレイク：ラジャータに住む令嬢。 父親よりも母親似。

今回は、シオンVSリドリーとなります。

あっけなく書いてるので、読む気になればいいなと思います。
それでは・・・

Case 2: 『シオン VS ・ リドリー』

四人は、セレクション会場 待合室にたどり着いた。

「さて、セレクション会場に着いたが……」

そこには、明らかに弱そうな面子しか揃っていなかった。

(うわぁ……)

「これじゃあ、私……やる気でないわ」

「俺でもやる気が出なくなるわ……」

そこへ一人の甲冑の男が出てくる。

「これより、騎士団セレクション……第一試合を開始します!」

「選手の方は、コロシウムへ……」

「……来たわね。」

「頑張ってくださいよ、シオンさん!」

「ああ、おじさん頑張っちゃおうよ」

そっついながら、コロシウムへと向かっていった。

「色々としりとりじゃねえか、シオンの奴。」

「そうですね、ゼロ。」

「あの子はなんやかんやで楽しむ子だからねえ……」

「そっついえば……シオンさんの相手って誰なんですか?」

「さぁ……」

アクトは、対戦板を見ている。

そこには、『シオンⅡアリシア VS リドリー・ティンバーレイ

ク』と書かれていた。

「わお……どちらも長い名前……」

「何か……両方とも女性みたいな名前だな。」

ゼロとアクトは、それを見て苦笑していた。

「名前は所詮飾りなんですよ、偉い人には以下略。」

一方、コロシウムでは……

「はあ……コロシウムっていうぐらいだから、結構なお祭り騒ぎかと思いきや……そうでも無かったな。」

確かに……コロシアムの観客席には誰も居らず、ただ騎士団で偉い人などが観客として見ていた。

「しかし……相手は一体何者なんだ？ 対戦カード見もせず聞きもせず来たからな……」

そこへ、相手側の扉が開く。

「おっ来た来た……って、へっ？」

シオンは、相手を見て驚いた。

相手は、中学生ぐらいだろうか……？ まだそれぐらいの年の女の子が相手だった。

（おいおい！ 相手は女かよ！？ いや、ちょっと待て……顔をよーく見てみると……）

シオンの目には、リドリーの顔がよりいっそ綺麗に見えた。

（美人……！ しかも超好みだ……！）

シオンは、色々と頭の中がやばかった。

そんなシオンを知らず、リドリーは戦いに向けて集中していた。

（いよいよ、この時だ……）

（相手は、どんな奴であろうと……必ず勝つッ！）

「よーい……始めッ！」

レフリーの掛け声と共に戦いが始まった。

まず、攻め込んできたのはリドリーの方だった

リドリーは、斧を振り下ろしての攻撃を繰り返すが……あっさりとかわされてしまう。

しかし、かわしてリドリーに隙があっただろうに……シオンは、一切攻撃しようとしなかった。

無理もない。彼は、リドリーに一目ぼれしてしまい……攻撃がままならなくなってしまったのだから

そんな事も知らずに、リドリーは攻撃を繰り返す。

単純明快な攻撃だが、徐々に相手を追い詰める攻撃だった。

しかし、シオンの回避はそんな攻撃をもともしなかった。

壁に追い詰められそうになれば、すぐさま高く跳んで中央へ戻る。

そして、リドリーが再び追い詰める。その繰り返しだった。

（こいつ……一体何をしているんだ……？）

シオンのやっている事にリドリーは、感ずいたか……？

攻撃の動きを一時的に止め、ジリジリと見合いあう

（さっきから、私の攻撃をかわしまくって尚……攻撃してこない）

（何を狙っているんだ……）

リドリーは、少しばかり警戒していた。

だが、彼女の読みは大分外れていた。

ただ単にシオンは、”彼女に攻撃したくない。”これだけの為に先ほどの行動を繰り返していたのだ。
あの行動を繰り返せば、いずれかはバテて攻撃できなくなるだろう……そんな考えだった。
二人の見合いは続く……

「……お前、名は？」

シオンは、口を開けた。

「俺の名は、シオン。お前は？」

その言葉にリドリーは少しばかり疑問に思った。

（何故、私の名を知らない……対戦板を見れば早い話を……作戦の内か？）

「私の名は、リドリー・ティンバーレイク！ この勝負……勝たせてもらうッ！」

しかし、リドリーは答えた。相手に敬意でも表したのか？
そして、再び先ほどと同じ泥試合が始まる。

そんな泥試合を見ていたアルカード達……

「な……何をしているのでしょうか、シオンさんは……！」

「なあ、アルカード。あいつ、まさか……」

「ええ、完全に一目惚れしたわね。」

アルカードは、何処か嬉しそうな感じだった。

「チィ……！ 何故、私の攻撃をかわしながらもそちらから攻撃を仕掛けてこない！」

「……答える気にはなれない。」

シオンの言葉にリドリーは苛立ちを覚えた。

（なっ……！ このシオンとかいう男……さっきから私をナメているのか！？）

シオンは考えていた……

（あのリドリーって女の子……地味にタフだな……あれから既に15分は経ってるぞ）

（仕方ない……試してみたい事もあるしな。）

次の瞬間。

シオンは、両手を上げて……まるで、熊の威嚇のようなポーズをとった。

それを見たリドリーは、一歩後ろへ下がる。

（な、何だ……！ あの体制は……まったくもって隙だらけ！？）

「……一撃を許す。撃つて来い。」

（挑発か？ いや……それにしては、あの表情は……）

「どうした？ 臆したか？」

シオンは、少しばかりリドリーを挑発した。

「……よぉーしー!!」

リドリーは自分の頬を叩き、気合を入れる。

そして、斧を構える……

斧からは、空気中の酸素が引き寄せられるかのように集まる。

（ヒュ）………すげえ闘志じゃねえか………ますます気に入ったぜ!!）

「……来いッ！」

シオンは、腹をくくった。

「食らえッ！ 我が一撃!!」

”ワイルド・ピッチ!!”

リドリーの必殺の一撃が、シオンのどてっ腹に直撃したッ!!

そして、そのままシオンの体は吹き飛んでいってしまう……
シオンの体は、そのまま動かずにいた。

(……やったようだな。)

リドリーは、安心して構えを解いた。

しかし

パンッパンッパンッ。

リドリーの後ろで、拍手の音が聞こえる。

リドリーは、素早く後ろを振り向くと……

そこには、倒したはずのシオン＝アリシアの姿が……

「ば、馬鹿なッ……！ 確かに……確実に仕留めた筈……！」

「ああ、確かにモロに入ってたぜ？」

シオンは、少しずつリドリーに近づく

「技術良し、体力良し、タフネス。そして……」

シオンの顔は、リドリーの目の前まで迫ってきていた。

「美人だ。」

「……………ッ！」

リドリーは、斧を振り下ろすが……何と、片手だけで受け止められてしまった！

「なっ……………！？」

「しかも、強情なタイプはますます俺の心をそそる。」

シオンが手に持つ斧から電流が流れ込む。

「いつ……………！」

「ん？ 電気はお嫌いかな？」

もう片方の手が、リドリーの胸を押し当てる。

「少しばかり、眠っていてくれ。」

バチイイイーン!!

全身に流れ込む激しい電気がリドリーを襲い……そのまま倒れこんだ。

「Good Night」

シオンのその言葉を最後に……リドリーの意識は、暗い闇の中へと引きずり込まれていった。

Case 2: 『シオン VS リドリー』 (後書き)

？あとかき？

どうもおおおー！！！！ 零式でおまッ！

最近、喉が痛いおおお！！！！

フオオオオー！！！！！！！！！！

(零) < よし、落ち着こうか。

さて、リドリー VS シオンですが・・・
なんだ、この戦いは・・・

すみません。

私の力では、これが限界なんDA

そして、このあとかきも必要なのか？とね・・・
でも、ご安心を・・・

「後々編集」という切り札がございますので・・・
後々見てくださったら、中々良い物が出来ていると思います。

そんなこんなで、次回に続きます。

(一日三話をベースに書きたい・・・)

？ここからは、世界観の説明です。？

？ラジアータ？

シオン達が目覚めた場所。
ここでは、騎士団などが色々あり・・・城下では色々なギルドがある。

勿論、出店などが数々あり・・・ここでは、武器や薬品などのアイテムが購入できる。
意外と都会である。

？地の谷？

ドワーフという種族が住む場所。

そこでは、鉱山などで採れる鉱物が沢山採れている。

その為、長老の家は金ピカで・・・意外とお金に困らない場所。
実は近代的だと言う・・・（本当かよ。）

？ダークエルフの集落？

ダークエルフという種族が住む場所。

非常に秋の季節感が漂う場所で、そこでは毎日のようにダークエルフ達が笑顔で暮らしている。

踊りや酒など・・・実に平和な場所とも言える場所である。

？花の都？

ライトエルフという種族が住む場所。

外部から遮断された場所で、ライトエルフの人間嫌いのせいか・・・入り口が外の世界から隔離されているような風景である。

しかし、一足その入り口の中に入れば・・・そこはまさに『花の都』と言える風景である。

未だに・・・その領域に足を踏み入れた者は居ない。

Case 3：『桃色豚鬨士団 結団！』（前書き）

？まえがき？

どうも、零式です。

今回は、戦闘シーン無しです。

ただ単に喋るシーンばかりです。

はぁ・・・最近、「うp主が書く小説は全てが台本っぽい。」っとよく言われます。

反発する心を抑えて言いますが・・・分かっております。

ええ、私の小説は台本っぽいんですよ。 何故か。

台詞ばかりで、動きの語り部分が無いッ！

うーむ・・・

これは一体どうしたモノか・・・

もう少し、語りを増やしたいモノだ。

……最終的に……漫画でも描こうかな……？

いや、ジョーダンですよ？ マジで。

漫画描けたら小説書いてないから。

それでは、簡易キャラ説明です。

？登場キャラ？

・シオン：リドリーの事が気になって気になって・・・どうしようもない男である。

・アルカード：何やら、凄くオモイー物を背負っている様子。

・Zero式：一話のあとがきに『BL担当』疑惑。これイカ
に・・・

・アクト：相変わらずのオタク知識・・・お許しくださいッ！

――・・・第三話：【桃色豚闘士団 結団！】

Case 3 : 『桃色豚鬨士団 結団!』

リドリーは、目を覚ました。

「うつ……ここは?」

「り、リドリー様ああああ!!」

目を覚ましたリドリーにナツメが抱きついてくる。

「な、ナツメ!? は、放してくれ! 苦しいッ!」

「あつ……申し訳ありません……」

「それより、ここは……?」

「ここは、リドリー様がこれから騎士として暮らす部屋でございます。」

「……ハア!? いや、だって……私は確かシオンとかいう男に……」

「ええ、確かに負けました。 ですが……」

「……お父様ね?」

リドリーは、すぐさま父の仕業だと気づきナツメに問い詰める。

リドリーの質問にナツメは、少しだけ頷いた。

「で、ですが……こうして晴れてリドリー様も騎士団に……!」

「私は……!」

リドリーが色々と言おうとしたその時……リドリーの懷から手紙が一枚落ちる。

「ん?」

リドリーは、落ちた手紙を見てみた。

そこには、差出人は……シオンからだった。

——親愛なるリドリーへ——

この手紙を読んできているという事は、君は目を覚ましている頃だろう。

最初に言っておく。

あの時、君に微量ながらだが・・・電流を流し込んでしまったね。

そこは、ハッキリと謝る。すまなかった。

そして・・・君が俺と一緒に騎士団に入ってくれと分かった時は、凄く嬉しかった。

こんな俺だが、どうか怒らずに笑顔と一緒に騎士団の仕事をしていてくれ

「シオン」アリシアより——か……」

「まあ図々しい事ですこと……！ リドリー様をあんな目にした張本人が……！」

「いや、良いんだ。 ナツメ……」

「しかし……」

（しょうがないな……こんな手紙とか……身内以外から貰ったのは、これで初めてだ。）

リドリーは、ギョッ・・・と手紙を握り締めた。

「ナツメ、服装の準備を……」

「は、はいッ！」

その頃、シオン達はというと・・・

（リドリー……ちゃんと手紙を読んだらどうか……）
シオンは、ソワソワしていた。

「遅いですね、リドリーさん……」
共にソワソワしている小太りの男。
名は『ガンツ』

これからシオン達が所属する事になる騎士団。

『桃色豚闘士団』（ローズ・コシヨン）の団長である。

「シオン、貴方電流の加減を誤ったんじゃない……」

「いや、それは無いと思うがな……」

ガチャ……

ドアが開き、そこへリドリーが入ってきた。

「すみません、遅れてしまいました……」

「リドリー！」

シオンは、いち早く近寄る。

「すまなかつたな、リドリー……少しばかり、電流の加減が過ぎてしまったかと思って……」

「あら、そんな筈は無いって言うてじゃない」

「シッー！ アルカードさん、それは言わないのが花つてもんですよ！」

「いや……私は大丈夫だ。あの程度でへこたれていては、騎士として恥だからな」

「そうか、なれば良いんだが……」

まだ少しだけ、シオンは心配そうな顔をする。

それを見て、リドリーは少しだけクスクスと笑う。

「何か……面白い奴だな。お前は……」

「ん？ そうか？」

「それよりも……リドリーの格好淒く似合ってるんじゃない？」

アルカードが話の話題を変える。

「ああ……コロシウムでの格好も中々だったが、騎士団用の服も似合うな。」

「まさに『花は何を生けても似合う』……ですね。」

「アクト……その言葉。何処で覚えたんだ？」

「独学です。」

「本当に……面白い奴らだ。お前達は……」

そんな感じで、色々としどりと和むメンバー達であった……
そして、その後は桃色豚闘士団の結団式が行われた。

「さて、これにて結団式は終了し……続いては、今後の任務についてです。」

「おっ……その話になりますか」

「はい！ 早速、我々の騎士団に重要任務が入りました！」

「ほう……任務内容は？」

「”ドワーフの護衛”です！」

「護衛任務か……」

「つまり、ボディガードの仕事って訳ですね？」

「エンダアアアアアアア……！」

「アルカード、騒がない。ボケない。」

シオンがツツコミを入れる。

「詳しい内容をご説明しますと……」

ガンツ団長が言うのは、以下の通りだ。

ドワーフは、人間に鉱物やその地の特産物を提供してくるそうだ。
その為、彼らとは交易関係となっている。

しかし、そんな中でも危険は沢山あり……盗賊などの輩が頻発しているとか……

そこで、我々騎士団の出番という訳だ。

無事、荷物を護衛し……ラジアータ城までドワーフを運べば任務完了となる。

「以上が、任務の詳細です。」

「成る程。それじゃあ、今回は一時解散ですね？」

「ええ、明日は長旅になる可能性があります。心して挑むように

……」

「了解。」「」

そして、各騎士団メンバーは自分の部屋へと戻っていった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ここは、騎士団専用寝室。

だが……シオン達が寝泊りする場所は、少し変わっており……

「まさか、ゼロの能力で世界観丸つぶれの部屋にするとかな……」

「しかも……何故にパンツレスリングの兄貴部屋。」

「だって、兄貴ネタ好きなんだもん。」

「なったお！ そうなったお！」

「それよりも……シオン。」

「何だ？ アルカード。」

「貴方、リドリーを私達が住んでいる場所に連れて行くこととしてるでしょ？」

アルカードの言葉に同様するシオン。

「なっなんのことやら？」

「あんた……嘘つくの下手だっけ？」

「人は動揺すると……嘘が下手になるもんですよ？」

「そうなのか？ アクト。」

「そういうモノらしいですよ？ 人間って者は。」

「まあ……リドリーを連れて行くとういうのは認める。一目惚れしたのも認めよう……」

「だが、絶対にリドリーをこっちの世界に連れて帰るまでは、絶対に帰らないからな。」

「あーらら、これは……完璧にシオンを応援しないと帰れないフラグじゃない？」

「ですな。」

「そうですね。」

「分かったのならば、何か良いアイディアは無いのかな？」

「そこはそこ。自分で考える物ね。」

「チッ……良いじゃないか、二人も惚れた女性なんだからさあ……」

シオンの言葉にアルカードの顔から笑顔が消えた。

「こらッ！ シオン！」

「あつ…… スマン…… これはNGワードだったな。」

「良いの…… あれは…… 私のせいだから……」

それから…… 暫らくは、アルカードの表情に笑顔が戻らなかった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

そして……

「龍殺しの英雄…… ジャック。」

「まだ、振り切れてないようですね。 ジャックの友…… ガウエイ
ンの息子。 ガンツよ……」

暗い部屋の中でガンツと向き合って話す男……

名は『サルート・ラクス』

ラジアータ王国宰相で、騎士団総参謀長の両方を務めている。

言わば、王国のエキスパートと言っても良い人物である。

そんな中、話が段々と進む。

「貴方には、振り切れない物が一つだけある……」

「今回の騎士団結成…… 私は、期待してますよ？」

「……お任せください。」

そして、ガンツは自分の部屋へと戻っていく

「……振り切れない物——か……」
「父上……」

こうして、一夜が暮れるのであった。

Case 3：『桃色豚鬪士団 結団！』（後書き）

？あとかき？

どうも、この話は二話とまとめとければ良かったね。零式です。最近、寒さが半端なくなってきたて・・・手が寒いお・・・暖房が欲しいです。

寒いせいか・・・若干風邪気味である。

はーやく春にならないかしら・・・

（リ）＜春だZE

彼女の声が恋しい季節だわぁ・・・

さて、今回は・・・騎士団について少しだけ説明。

騎士団には、色々な団に分かれております。

【桃色豚鬪士団】

今回、シオン達が結団した騎士団。

まあ、段階で言うのであれば・・・下の下だな。

呼び名は・・・（ローズ・コシヨン）

【紫色山猫剣士団】

決して、若き頃のオセロットが居る部隊ではない。

あれは山猫部隊や・・・
スベツナムツ

特に出番も何も触れられてません。ただ単に名前だけ・・・

呼び名は・・・（ヴィオレ・シャソヴァージュ）

【黒色山羊槍士団】

この後、この団の人とえらいこつちやな事になる。

正直・・・後々消えてなくなる部隊だからどうでも良い。

呼び名は・・・（ノワール・シュペール）

こうして見てみると・・・動物の名前がチラチラと入ってるね。

何で、RPGの世界の人たちは動物をモチーフにする人が多いん？

次回に続く。

Case 4：『はじめてのにんむー!』（前書き）

？まえがき。？

どうも、この小説ではお久しぶりです。零式でおま。

何故、遅れたのかは何となく察して頂ければ理解できるでしょうか
ら言いません（おい）

さて、今回はちよつと尺を伸ばした話となります

それとお知らせです。

今後からは簡易版キャラ紹介はありません。

キャラについて知りたい方は、第一話のあとがき部分を見ていただ
ければ宜しいかと・・・

さて、そんなこんなで今回も張り切っていきますよ

Case 4：「はじめてのにんむー!」

Case 4：『はじめてのにんむー！』

——？ラジアータ城：エントランスにて……？——

リドリーと団長は、シオン達が来るのを待っていた。

「遅い・・・」

リドリーは、少しイライラしながらも待つていた

「まあまあ・・・リドリーさん、あんまり怒りすぎるとお肌に宜しくありませんよ？」

ガンツ団長は、イライラしているリドリーを抑えていた

そして、待ち合わせから数分ばかり……漸く四人は遅れてきた

「おおーい！」

「すみませーん！ 遅くなりましたー！」

そのワリには、歩いてでの登場だった。

「……遅い！ 数分もの遅れだ！ それと、遅刻してるのに歩いてくるとは何様だー！」

リドリーは、遅れた四人に怒鳴りつける

「まあまあ・・・待ち合わせていうのは、相手側は遅れるモノなのよ？」

「そういう……モノなんですか？」

アルカードの言葉にアクトは苦笑いで質問する。

「そういうモノです。」

それに対してのアルカードはキリツとした顔で答えた。

「まあまあ、リドリーさんも抑えて・・・こうして全員集合できたのですから良いじゃないですか」

団長は、何とか怒っているリドリを落ち着かせる。

「さすがは団長。心が広い……」

そんなガンツ団長をゼロは褒める

「いやあ……」

「ハア……行きますよ。」

照れているガンツ団長を後に、怒りを通り越して呆れ果てていたり
ドリーが無理やり仕切る。

- - - - - ?

-----?

？ラジャータ城：入り口付近にて……？

「おや？ あそこに居られるのは……」

ふと、ガンツ団長が目に入った人影……

(ゲツ……)

その人影にリドリーは、苦い表情を見せる。

その人影の正体は……リドリーの父親、ジャスネだった。

「これはこれは、ジャスネ様。朝のお散歩ですか？」

「ああ、来たか……いや、まあ……そんなもんだ。」

ツーン

リドリーは、父に対して冷たい態度を見せる

「リードリー?」

「皆さん。こちらに居られるのは、御家老のジャスネ・コルトン様です。」

「あら、それはどうも」

「どうもジャスネさん……」

「アルカードさん、ゼロ……そんな態度は少しばかり、どうかと思えますよ？」

二人の軽すぎる態度にアクトは、少しだけ動揺する。

「そうですね！ もう少し低調な態度を……！」

「だが、断る。」

「だが、断る。」

二人は即答だった。

「団長……すみません。あとでキツく言ってきますので……」

「でも、何でリドリーには言わんの？」

ゼロが疑問に思ったことを口にする。

「それは、リドリーさんがジャスネ様のご令嬢だからですよ！」

「な………！」

「なんだって………！」

「なんだって………！」

「なんだって………！」

「なんだって………！」

四人全員が、その事実^{じじつ}に酷く驚いた。

「えっ！？ 嘘お！？ マジい！？」

「Jesus！ それは真なのかあああああ………！」

「に、似てませんよ！？ 主に顔が！」

「嘘だって言つてよ！ バーニイイ——！！」

そして、必死にその事実を否定しようとしていた。

「ちよつと！？ 四人とも酷いですよ！？」

突然の事で、ガンツ団長は驚いた。

「あつ……でも、ちよつと待つて。 確かリドリーのファミリーネームは……」

シオンは、リドリーのファミリーネーム『ティンバーレイク』に疑問を持った。

「ああ、そのことでしたら……」

「ジャスネ様は、北方大鷹ホッポウオオタカの称号を持つ名家メイカ……ティンバーレイク家の入り婿さんでして」

「ティンバーレイクを名乗れるのは血統のみと決まっているんですよ。」

「成る程。」

「それよりもだガンツ君……もし、リドリーの身に何かあったら……」

……」

「お父様ッ！」

リドリーは、そんな父を怒鳴りつけて睨む……

「あ、いや……な、何でもない。」

（ヘタレ＋ロリコン……）

（アルカード。その場合はロリコンと呼ばないんじゃないか……まあ、変態なのは確かだが……）

そんな”あまりにも哀れな親父”を見ていた二人は心の中でひっそりと会話していた。

（まったく……困った人だ。）

「……行きますよ。」

すっかり父親に呆れていたリドリーは、ため息をつきながら歩く。そんなリドリーヘシオンが近づく……

「……あれも親の愛って奴か？」

「……異常な愛……と読んでいいかな？」

「ああ……確かに、その言い方が正しいかもな。」

「私の父は、私を生神でも思っているのだろうか……」

「いや、ただ単に可愛いから……だと思っぞ？」

「それだけで、あんな異常なまでの愛を注ぐのか？」

「そんなもんさ。男って奴は……——勿論、俺もな。」

「えっ……？」

? - - - - - ?
- - - - - ?
- - - - - ?

? ラジアータ城下：門前にて……？

「さて……ようやく門に着いたが……」

「改めて、任務の復習をすれば……メインミッションが『ドワーフの護衛』だったわね。」

「ええ、そうですね？ ガンツ団長。」

「はい、それじゃあ……桃色豚騎士団。出発！」

こうして、シオン達は地の谷を目指して歩き始めた。

その後ろの物陰で、動く気配……

「行ったようですね……」

後ろで監視をするかのように、後をつけている者……それは、ジャスネ直属の部下。 ナツメであつた。

「ナツメ殿……何故我々が、こんな事を？」

その後ろで、嫌そうな顔をしている男は……

ナツメの部下である者……名は”レナード”

……ちなみに、シオン達が一時的に住む部屋の隣人である。

「ジャスネ様からの密命です。」

何と……あのジャスネ（アンパンマン）が、

裏でこっそりとリドリーの護衛をするように手引きしていたのだ！

「リドリー様は、ジャスネ様にとって大切な愛娘……」

「だったら、騎士団なんかに入らなければ良いのに……」

レナードは、ため息をつきながら小声のように呟く

「仕方ないのです!」

しかし、その台詞はナツメの耳にしっかりと聞かれていた。

「ティンバーレイク家は代々・・・ラジアータに仕えていた貴族の家系……」

「リドリー様は、その名を継がなければならないのですから・・・」
「ああ・・・それにしても、娘の身を案ずる　その父親の姿・・・
?　素敵だわあ・・・?」

（この人、真面目だったら美しい方なのに……）

レナードは、ハアハアしているナツメを少し軽蔑するかのような目で見ていた。

「はっ・・・!　こうしている場合じゃないわ!　急ぎますよ、レナード!」

「……はい　（まったく、この人は……）

? - - - - -
- - - - - ?

「雷の蛇よ!」

鋭い電流の刃が、巨大なコウモリを切り裂く!

「うん、この程度と適量の敵ならば・・・スムーズに任務が完了す

るだろうな。」

「気を抜くな。オークが出現する可能性があるんだぞ?」

リドリーは、少し気を抜いたシオンに釘を打つかのように言う。

「ああ、そういえば・・・そのオークって奴だが……本当に強いのか?」

「ある意味、弱そうな考えしか浮かばんのだが……」

「なっ・・・! お前、それは正気で言ってるのか!?」

リドリーは、シオンの言葉に衝撃を受けた。

「いいか? さっきも話したとおり、オークとは大変危険な種族なんだ!」

「好戦的で、力も強い。おまけに肉体防御が凄く高く硬いんだ!」
「オークの影響で、どれだけの種族が犠牲になった事やら……」

「ふゝん……肉体防御が硬いのと力が強いのは理解できるが……」
「実際、技を繰り出すスピード。移動速度。次の行動を有利にする知能。」

「それがちゃんとしているのかどうかを俺は知りたいんだ」

「実際、戦ってみて……もし、先ほどいった三つの物が不足していた場合。」

「幾ら力が強く、肉体が頑丈であっても……勝てる見込みがあるって事だ」

シオンは、色々と戦闘の技術をペラペラと喋る。

リドリーには、少しばかり理解が足りなかった……。

「あ……えっと……？」

「シオン、あんた熱意に話すの良いけど・・・相手を選べなさいよ？」

「えっ……？ あっ」

アルカードの声を聴いて、シオンはハッと我に帰る。

そこには、頭に？マークを出して少し考えすぎて混乱しているリドリーの姿が・・・

「あっあー……すまん、リドリー……熱が入りすぎた……」

[illegible]

？地の谷：入り口近くの丘にて・・・？

「さあ！　いよいよ地の谷が見えてきましたよ！」

「ほう、どれどれ……」

ゼロは、その光景をいち早く見てみる。

「…… ああ、色々で見慣れている部分があるが……まあ、凄いな」

その感想は、色々と味気ない物だった。

「どうしましたか？ ゼロ。」

「見れば、分かる。」

そう感想を述べるゼロに「？」つと、なるアクトだが・・・
地の谷を目視すると・・・

「ああ・・・これは、まあ・・・うん。」

「私が知っている物とそっくりですね、それよか・・・時代が遅れてる。」

そんなこんなでゼロとアクトが呆気無さそうな会話をしている中・・・
アルカード達は、さつさと地の谷の門まで向かっていた。

「すみませーん！ 騎士団の者ですがー！」
シオンが大声で門番に聞こえるように叫ぶ。
「いけませんよシオンさん！ 物事には順序……」

『おう、騎士団の奴らかあゝ入れゝ』

あっさりと門が開く・・・

「……………」

ガンツ団長は黙り込んでしまふ。

「あー・・・えつと・・・どんまい？」

シオンから慰めの言葉が来る。

？
- - - - -
- - - - -
？

？地の谷？

桃色豚闘士団は、無事・・・地の谷へ入る事が出来た。
さあ、まずは『長老』に挨拶に行こう！

「……何か、今。すつごくヤラせ臭い番組のナレーションが聞こえたような・・・。」

「気のせいよシオン。うん、気のせい。」

「さあ、着きましたよ。こちらが、長老様のお家です。」

五人は、長老の家を見る・・・。

（（（金ピカ——！！！！）））

「金ですね。」

「ああ、金だな。」

横で三人が驚いている中・・・アクトとリドリーは平然としていた。

「えっ・・・リドリーは兎も角……アクト。お前、金に然程興味なし？」

「まあ・・・金は頑丈なので丁度良いかもしれませんが・・・。」

「別にお金の方では、全然興味の欠片も……。」

「……うん、まあ・・・別にそれでも良いけどさ・・・。」

何故か、ゼロとアクトの周りに変な空気が流れる。

「さて、リアクションも済んだ事だし、さっさと中に入って長老さ

んに会いましょう」

「そうだな。」

（あれえ〜〜？ 僕達は完璧に無視ですかい？）

二人は、あまりのアルカードとシオンのスルースキルに心の奥底から叫んだ。

全員は、金ピカの長老の家にへと足を踏み入れる。

「表も金だが、中も金なのねえ・・・」

「こりやすげえな・・・」

「……………」

ゼロとアクトは黙りこむ。

「あら？ 二人とも、もうコントとかはしないの？」

「いや・・・何かもう・・・疲れた。」

「同じく・・・。」

桃色豚闘士団の一行は、無事に長老と対面することが出来、運搬の依頼について話を終えた。

そんな中・・・。

『ああ、すまねえんだけど・・・これを王の所へ届けてくれんか？』

長老は、懷から封筒を取り出しガンツ団長へ渡す。

「何ですか？ これは」

『それは、鉱物と武具の新しい売値をしたためた新書だ……』

『最近、この地の谷も酷く枯れ果てているのだ……』

『水は濁り、今まで取れていた鉱物などが次々と採掘が出来なくなっている……』

「それで、新書を……」

長老は頷く

『出来ればワシらも新書など出したくもない……だが、今の地の谷では限界がある。』

『だから、少しでも良いから我らの売る品を高く買って欲しいのだよ……』

（まあ……どんなに環境に優れていても、やりすぎればすぐにも尽きてしまうわな）

シオンは、その話を聞いていて思った。

「分かりました。 ちゃんとお渡しします!」

こうして……長老との話を終えた。

？その夜……宿屋にて？

「無事、チェックポイント通過だな。」

シオンが言う。

「チェックポイントだからといって、気を抜いちゃダメよ？ シオン。」

シオンの台詞を言い返すようにアルカードが喋る。

「分かってる。」

そこへ、ガンツ団長がミーティングを終えて戻ってきた。

「荷の護衛は準備の為、明日になるそうなのでしっかりと休んでくださいね！」

「あゝい、ゆつくり休んでいつてね！！！」

「ゼロ・・・言うと思いましたよ。」

「……やっぱりそう？」

（アホか・・・）

リドリーは、そんな四人の会話を聞きながら苦笑いで思った。

「そつえば、リドリーさん。初めての街の外に出て疲れたでしょう？」

「いえ……」

「なーにー！？」

ガンツ団長の台詞にいち早く反応したのは・・・シオンだった。

「リドリー、ラジータから外に出るの初めてなのか！？」

「あ、ああ・・・」

「何か、『初めて』というキーワードがエロく聞こえるのは・・・あただけ？」

「アルカードだけだと思うぞ？」

「おいおい・・・あのアンパンマン、随分とひでえ事してるじゃないか！」

「シオン。アンパンマンでもリドリーのお父様よ・・・」

「まあ・・・確かにそれは酷いわね」

『うむ、わしが今回の依頼を頼んだ者じゃ』

「それじゃあ、早速行きましょつか」

桃色豚鬪士団は、荷を積んだ荷車にぐるまを挟むようにして護衛任務を開始した

その背後でうごめく何か・・・ナツメ達ではない何かが動いた・・・
「それにしても……」

道中、シオンが喋りだす

「こつも楽すぎると逆に怖いモノだな」

「何を言っているんだシオン。 任務に何も支障が無いだけでも有難いじゃないか」

「リドリー・・・それが逆に怖いんだよ」

「……？」

「ああ、そういえばシオンって……」

ゼロが言いかけたその時だった

「ゼロ。 ……その事はNo・・・よ？」

アルカードは、ゼロに向かって口止めをするように言葉を発する

「……………」

リドリーには、その言葉の意味が何だったのか分からなかった・・・。

？ - - - - -

- - - - - ?

？ その道中・・・？

「待て、ここから先は通さん。」

ローズ・コシオン
桃色豚鬪士団の前に一人の男が現れる。

「ここを通してほしくば、その荷を置いていけ」

「もし、抵抗するならば・・・騎士団とも言えども容赦はせん」

男は剣を構える

「……だそうですが——どうしますか？ ガンツ団長。」

「い、いきなりの奇襲……！ どとど……どうしたものか……！」

「——ダメだな……こりゃ……」

シオン達は、団長の慌てっぷりに呆れた……

「仕方ない。ここは俺がやる」

シオンが男の前に立つ。

「おい。お兄さん、こんな所で油売ってないでさあ……」

シオンが馴れ馴れしい発言で言うが……

「黙れ。貴公^{きこう}が邪魔をするならば……その身を切り裂く。」

男の鋭い言葉が瞬時に返ってきた

「……わーたよお……殺りやあ良いんでしょが……」

シオンは「やれやれ……」とため息をつきながら構える。

構えた二人は暫らく睨み合いながら黙り込んだ……

そして、傍にあった木から葉っぱが一枚ヒラリと落ちた瞬間——

「でやああああああ……！」

男は大きな声で……シオンは無言で真剣な眼差しで攻撃を仕掛けた……！

男は剣術を次々と披露しながらシオンに攻撃をし続ける。

だが……肝心なるシオンは何も攻撃も防御もせず。ただただ……

・回避だけに集中していた。

「……す、相手側も凄いですが……シオンさんも中々……」

ガンツ団長はその光景を目にして啞然としていた

だが、リドリーは何処か苛立ちを覚えていた

（あいつ……何をやっているんだ！ 攻撃されて回避したのならば、さつさと攻撃を仕掛けなにか……！）

リドリーは、シオンの戦い方に何処か不満を覚え苛立っていた。

だが……それはシオンの頭脳戦法。

よく男の方を見ると……

「はあ・・・！ はあ・・・！」

男は次々と凄まじい程のスピードと技量で攻撃を仕掛けたせいか・

だんだん男のスタミナが減っていく・・・！

（何故だ・・・！？ 何故、私の攻撃がかわされる！？）

男はゼイゼイと息を切らせながらも攻撃を続ける。

その動きには先ほどの勢いが無くなっていた・・・

「——そろそろ頃合いかな？」

シオンがボソリ・・・と独り言を喋ると同時・・・！

シオンの攻撃が一発の正拳パンチにより始まった！！

「さあ・・・避けるだけの単純作業はもうお終い。ここからは・・・

・俺のターンと行かせて貰おうか！」

シオンから放たれる気迫が大きくなる！！

その気迫を生で受けた男は冷や汗、背筋にゾクツ！と来るモノを感じた。

「な・・・何だ！？ この気迫は・・・！？」

男がそう喋っている間・・・シオンは男の背後に立っていた。

（なっ・・・！？ み、見えなかった・・・！！）

「見えたか？ 見えなかったら、”あんたの負け”だ」

シオンの拳から電流がバチバチと流れる。

「さあ、一発で沈むなよ？」

”ドオオオオオーーーン！！！”

強力な一撃が男の腹部にぶち当たる！！

ミシミシとしまる肉体に男は苦痛の表情を浮かべた。

「があああ・・・！！！」

「まだまだ・・・」

”バチイン！！”

さらに追加として拳から電流を男に向かって流し込んだ。

電流は全身に伝わり、心臓、肺、内臓・・・全てに伝わり走った。

「がうおおお・・・！！！」

「——えっと・・・つまり、どういう意味だ？」

「あらあら・・・リドリーちゃんには、まだ理解度が足りなかったようね」

「こら、アルカード！」

少しばかり茶化すように言葉を発したアルカードをシオンは怒鳴りつけた。

「おっと失敬。」

「……まあ、俺の力はちよいと特殊だね。　そんじよそこいらの電撃魔法の比じゃないって事は確かだな」

「うゝん・・・まあ、一応理解したことにしておこう」

シオンの台詞にリドリーは何となくだが理解した。

そして団長が手続きを終えて帰ってきた。

「皆さんお疲れ様です！　初任務にしてはリアルティでスリリングでしたでしょ？」

「何処が？」

「何処が？」

アルカードとゼロの言葉が重なる。

「ちよつ・・・アルカードとゼロ。　失礼だつて・・・」

「そうですよ。　確かに物足りない部分は多少ありましたが・・・」
「アクト・・・お前、その台詞も酷いと思うぞ？」

「ま、まあ・・・これにて任務は完了です。　後の報告は私の役目です。　皆さんはこれで解散しても宜しいですよ」

「あ、もう部屋に帰っていいってことね？」

「そういう事です。　それでは・・・お疲れ様でしたー！」

ガンツ団長の台詞と同時にメンバーは自分達の部屋へと帰ろうとした。

だが、そこでシオンがリドリーに声を掛ける。

「なあ、リドリー」

「……なんだ？」

「あのさ・・・どうだった？ 初の任務は・・・」

「……別に？ あの二人と同じ意見で大した事なかった。 それだけだ」

「……そっか！」

シオンは明るい表情を見せるが、何処となく寂しい感じがした・

・
「それよりもシオン。 さっさと自分達の部屋に帰った方が良いぞ？ 随分と疲れてるだろう？」

その台詞を聞いた瞬間。 先ほどの何処か寂しい感じが吹き飛び、さっきよりもとても明るい表情になった。

「そうだな。 それじゃ！ 次の任務も一緒に頑張ろうな！！」

シオンはリドリーに向かって手を振りながら去っていった。

そんなシオンの姿を見ていたリドリーはちよつとばかり嬉しそうだった。

Case 4:『はじめてのにんむ!』（後書き）

？あきがき。？

はいはいどうも、あきがきですよと・・・

後半部分が若干変わり気味なのは仕様です。ご理解とご了承を・・・

そんなこんなですが、次回はいいよ自分がやりがいある部分へと突入！

ここがキモだと私は思うんDA

はい。つーわけで次回も任務となります。

それと・・・今後からはちよいちよい尺が短い物になると思います。そこんところもご理解とごry・・・

……まあ・・・そんな訳ですから次回もヨロシクお願いしますよつと・・・

（多分、ポケスペなりオリジナルなりで浮気しまくってココの更新速度が今よりかなり低下する可能性大。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1806q/>

ラジアータ・マイ・ストーリーズ The episode

2011年9月15日00時35分発行